

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 7 日現在

機関番号：13101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25370404

研究課題名(和文) 日本楚辞学の基礎的研究 江戸・明治期を対象に

研究課題名(英文) A fundamental Study of Chuci (the Songs of Chu) - Studies in Japan in the Edo and Meiji Periods

研究代表者

矢田 尚子 (YATA, Naoko)

新潟大学・人文社会・教育科学系・教授

研究者番号：10451494

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：『楚辞』は、中国の先秦から後漢期にかけて成立した楚辞文学の作品集である。南宋の朱熹による注釈書『楚辞集注』が、朱子学を官学とする江戸期の日本で広く受け入れられたことを契機に、『楚辞』は日本においても漢学者たちの研究対象となった。江戸期の楚辞研究としては、芦野東山『楚辞評園』、董鷗洲『王注楚辞翼』、亀井昭陽『楚辞ケツ』が、明治期のものとしては、西村天囚『楚辞纂説』、『屈原賦説』等がある。本研究では、これらを手稿本・写本という形態から活字データ化することにより、研究資料として利用しやすくするとともに、当時の日本における『楚辞』研究の実相とその学術的意義を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：Chu Ci, or Songs of Chu, is an anthology of Chinese poetries, which was formed between the pre-Qin dynasty and the Later Han dynasty. Once Chu Ci Ji Zhu, or Collected Commentaries on Chu Ci, written by Zhu Xi (1130-1200) was widely recognized as significant work in the Edo period in Japan, where the Zhu Xi school of Neo-Confucianism was adopted at the government schools, Chu Ci became a research object of the Chinese classics scholars also in Japan. Such studies include Soji Hyo-en, by Ashi Tozan, Ohchu Soji Yoku, by To Ohshu, Soji Ketsu, by Kamei Shoyo in the Edo period, and Soji Sansetsu and Kutsugen Fu Setsu by Nishimura Tenshu in the Meiji period. In this research, we first digitized by typesetting the manuscripts of those Japanese scholars' works for facilitating future studies. We then clarified the actual situation as well as the academic significance of Chu Ci studies in Japan in those periods, the dawning era of the 'Japanese Chuciology'.

研究分野：中国古典文学

キーワード：日本楚辞学 芦東山『楚辞評園』 董鷗洲『王注楚辞翼』 亀井昭陽『楚辞ケツ』 西村天囚『楚辞纂説』 西村天囚『屈原賦説』

1. 研究開始当初の背景

(1) 『詩経』とともに中国詩歌文学の源流と見なされる韻文学の作品集『楚辞』に対しては、漢代以来、数多くの注釈書が作られてきた。そのうち南宋の朱熹による『楚辞集注』が、朱子学を官学とした江戸期の日本において、漢学者たちに受容されたことから、彼らも『楚辞』を研究対象とするようになり、「日本楚辞学」ともいべき学問分野が誕生した。

(2) 日本楚辞学の黎明期である江戸期の代表的な楚辞研究としては、まず浅見綱斎(1652-1711年)『楚辞師説』があり、それを発展させた芦東山(1696-1776)『楚辞評園』、董鴻洲(生卒年不明)『王註楚辞翼』、亀井昭陽(1773-1836年)『楚辞玦』がある。それら江戸期の楚辞学を受け継いだ明治期の西村天囚(1865-1924年)は、京都大学非常勤講師として『楚辞』の講義を行うかわら、『屈原賦説』上下巻、『経語考証』、『楚辞集釈』、『楚辞纂説』等をまとめた。

(3) これら江戸・明治期の楚辞学研究の成果は、漢学の優れた知見を持つ学者たちの手に成るものであったにも関わらず、写本や手稿本という流布形態ゆえに、中国はもとより日本の研究者の目にさえ留まりにくい状況にあり、等閑視されてきた。

2. 研究の目的

如上の状況を憂慮し、本研究ではまず、江戸・明治期の漢学者たちの手に成る黎明期の日本楚辞学の資料を蒐集・活字データ化し、研究資料として利用しやすい形にすることを第一の目的とした。また、楚辞学・日本漢学に携わる複数の研究者による多角的な考察を通して、当時における日本楚辞学の実像とその学術的意義を明らかにすることを第二の目的とした。

3. 研究の方法

(1) 本研究に参加するメンバー全員で、日本各地の研究機関に所蔵されている江戸・明治期の日本楚辞学資料を比較検討した結果、次の5点を活字データ化及び内容分析の対象とすることとした。

芦東山『楚辞評園』(岩手県一関博物館蔵)
董鴻洲『王註楚辞翼』(大阪大学懐徳堂文庫蔵)

亀井昭陽『楚辞玦』(慶応義塾大学付属図書館斯道文庫蔵)

西村天囚『楚辞纂説』(大阪大学懐徳堂文庫蔵)

西村天囚『屈原賦説』(大阪大学懐徳堂文庫蔵)

(2) 本研究チームのメンバーで上記資料を分担し、それぞれ活字データ化作業及び資料内容の精査を、次の3つの段階に分けて進めた。

資料の文字起こしと活字データ化。

難読箇所への解説と内容の検討。

活字化・解説済み資料を用いた考察。

(3) 研究期間全体を通して、定期的に研究会を開き、それぞれの作業・考察内容についてメンバー全員で検討を加えた。また同時に、各メンバーが国内外の学会において成果を発表し、それをもとにした論文を学術誌に投稿した。活字データ化が完了した資料は順次、電子テキストとしてホームページ上において公開している。

4. 研究成果

(1) 研究代表者の矢田と研究協力者の田島は、江戸時代中期の仙台藩の儒学者、芦東山によって書かれた、『楚辞』注釈本の稿本『楚辞評園』(岩手県一関博物館蔵)の活字データ化作業と内容の分析をおこなった。

東山は、仙台藩に対する度重なる上書の結果、処罰を受け、24年間の長きにわたって幽閉生活を余儀なくされた。その幽閉生活の間に『楚辞』の研究をおこない、成果を『楚辞評園』としてまとめた。東山が『楚辞』に傾倒したのは、諫言によって幽閉の憂き目を見ることになった彼自身の境遇が、楚辞作品の代表的作者とされる屈原と似ていると感じ、共感を覚えたためであると考えられる。

当該書は「評園」という書名からもわかるように、明の沈雲翔『楚辞評林』のように先行諸家の注や評を集め、所々に東山自身の評も加えたものである。朱熹『楚辞集注』の和刻本である『註解楚辞全集』第一冊～第六冊を底本として用い、その版匡外に手書きで注や評を書き込むという体裁をとっている。版匡外に書き込まれているのは、先行諸家の注や評が主であるが、その中に「徳林按」や「愚按」、あるいは単に「按」として、東山自身が注や評を記した箇所が合計41例ある。しかし、それらは殆どが先行諸家の注や評を踏襲したものであり、東山自身の創見と考えられるものは少ない。

(2) 研究分担者の大野は、大阪大学懐徳堂文庫に収められる西村天囚旧蔵書の一つ、北越董鴻洲撰『王註楚辞翼』の活字データ化作業と内容分析をおこなった。

董鴻洲について、饒宗頤『楚辞書録』(Tong Nam printers&publishers, 1956年)や崔富章『楚辞書録解題』(高等教育出版社, 2010年)は清人とするが、太宰春台(1680-1747年)の『論語古訓』や『古文孝経』、梅膺祚『字彙』に笠原簡室(生卒年未詳)が附した注である『字彙増注』等、日本人の著作を引用していることから、黄靈庚編『楚辞文獻叢刊』(国家図書館出版社, 2014年)が日本人とするのが正しい。北越即ち越後の人であり、太宰春台の門下に連なる人物であるが、本名や詳細な経歴は不明である。

当該書は『楚辞』本文と王逸注に対して、

その背景となる歴史故事を経書・諸子・『史記』などから引き、時に『文選』六臣注や『字彙』などに拠って訓詁や音注を付す。「翼」の名の通り『楚辞』及び王逸注の理解を助けるために他書の記述を引いたものであり、董鷗洲独自の見解は極めて少ない。注も後世の文学作品を訓詁に用いるなど精密なものとはいえず、新説を立てるよりはむしろ初学者が学ぶための便を図ったものといえる。『歴史綱鑑』等の初学者向け書籍を多く引用することからも、私塾での副教材あるいは教授資料として作られたものと考えられる。

(3) 研究分担者の田宮と研究協力者の荒木・野田は、江戸後期の福岡藩の儒者、亀井昭陽による『楚辞』の単注本『楚辞玦』(慶応義塾大学図書館蔵)の活字データ化作業と内容分析をおこなった。

亀井昭陽は、福岡城下の東西二ヶ所に設置された藩校の一つ、西学甘棠館を任された亀井南冥(1743-1814年)の長男である。西学は東学修猷館との政治的対立の中で廃止されるが、昭陽は私塾としての亀井塾を引き継ぎ、亀井学の振興に当たった。

昭陽自身の日記『空石日記』の記載によれば、塾生たちに請われて『楚辞』を講義することになったことをきっかけとして、天保五年(1834年)に『楚辞玦』を手抄したという。

『楚辞玦』には、京都大学図書館蔵本、慶応義塾大学図書館蔵本、大阪大学懐徳堂文庫蔵本、国士館大学図書館蔵本の4つの写本が存在することが先行研究によって知られていたが、本研究を進める過程で新たに九州大学中央図書館逍遥文庫蔵本の存在を確認した。これら5種の写本は、ほぼ同文であるが、抄写の際の誤記などにより優劣が生じている。そこで詳細に比較した結果、京大本・国士館本・阪大本が同一系統、慶応本と九大本が同一系統であることが判明した。そして、五種の中では慶応本が最善本であることが明らかになったため、活字データ化作業においては、これを底本とすることとした。

(4) 研究分担者の谷口は、西村天囚『楚辞纂説』(大阪大学懐徳堂文庫蔵)の内容分析をおこなった。

当該書は、歴代の典籍から屈原と楚辞に関する記事を摘録し、必要に応じて編者の按語を附した資料集である。天囚による楚辞関係の刊本や著作のコレクションである「楚辞百種」の一つとして懐徳堂文庫に収められている。編者自身の書き入れとみられる眉批や朱批があるため、未定稿であると考えられる。

第一冊の「巻一」の部分は、屈原の伝記、屈原を論じた文章、屈原の生涯やその墓に関する考証、歴代の各地における屈原の碑記などを集めており、屈原研究の資料集といえる。「巻二」には、賈誼の「屈原を弔う賦」をはじめ、歴代の文人が屈原を弔った作品や、屈

原の賦に倣った作品を集めており、楚辞の文学的展開を見ることができる。第二冊は、『漢書』芸文志・地理志をはじめ、各種の文献の楚辞に言及した箇所を収めている。第三冊は、『朱子語類』論文篇以下、楚辞に関する論評や考証を集めたものである。第四冊は、祝堯『古賦弁体』・徐師曾『文体明弁』・姚鼐『古文辞類纂』等の文体論の著作のうち、騷・辞・賦に関する部分の抜粋である。

集められた資料には、江戸時代の日本人がふれることなかった清代の著作や地方の文献が多く含まれ、日本の明治新漢学の興起とその展開の跡とをはっきりと示している。

(5) 研究分担者の矢羽野と研究協力者の前川は、西村天囚『屈原賦説』上下巻(大阪大学懐徳堂文庫蔵)の活字データ化作業と内容分析をおこなった。

天囚は大正5年(1916年)9月から10年8月まで京都帝国大学の講師として『楚辞』を講じており、その講義を漢文表記でまとめたのが『屈原賦説』上巻である。名目・篇数・篇第・篇義・原賦・體製・亂辭・句法・韻例・辭采・風騷・道術の12篇から成り、『楚辞』の概説的研究書であるといえる。これは大正11年(1922年)の6月から9月まで4回にわたり、天囚自身の書き下し文によって京都文学会発行の『藝文』誌上に公表され、さらに懐徳堂記念会から刊行された『碩園先生遺集』(1936年)第五冊に漢文表記のまま活字化されて収められている。

一方、下巻は名字・放流・自沈・生卒・揚靈・騷傳・宋玉・擬騷・騷學・注家の10篇から成るが、最後の2篇は篇目のみで本文がなく未完のうえ、執筆された部分も刪補の跡が入り乱れており、『碩園先生遺集』には収録されなかった。

しかしながら、大阪大学附属図書館懐徳堂文庫には「屈原賦説二巻 日本西村時彦撰大正九年手稿本 二冊」(『懐徳堂文庫図書目録』)という上下巻の草稿が存在し、下巻の全貌を見ることができる。それにより、上下巻を分析した結果、当該書は「博引傍証の概説的な研究書」と性格づけることができ、下巻末尾に付された覚え書きからは、『屈原賦説』後の天囚の楚辞学が「日本における『楚辞』の受容」へと向かおうとした可能性が指摘できる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

田宮 昌子、亀井昭陽『楚辞玦』に見る林雲銘『楚辞燈』との関係と共鳴、九州中國學會報、査読有、第55巻、2017、60-74

矢田 尚子、日本楚辞学的基础研究—以江

戸、明治朱時期為研究対象、中国楚辞学、査読有、第22輯、2015、404-406

矢羽野 隆男、『本朝文粹』における『楚辞』 西村天囚『屈原賦説』草稿の覚え書きから、四天王寺大学紀要、査読有、巻60、2015、1-18、
<http://www.shitennoji.ac.jp/ibu/wp/wp-content/uploads/2015/11/kiyo60-18.pdf>

〔学会発表〕(計5件)

田宮 昌子、「亀井昭陽の楚辞学 - 『楚辞玦』「離騷」注に見るその特徴-」、日本中国学会第68回大会、2016年10月8日、奈良女子大学(奈良県奈良市)

矢田 尚子、「関于芦東山《楚辞評園》」、2015年楚辞国際学術研討会暨中国屈原学会第16届年会、2015年7月27日、江蘇省淮安市(中華人民共和国)

大野 圭介、「関于大阪大学懐徳堂文庫蔵本《王注楚辞翼》及其作者」、2015年楚辞国際学術研討会暨中国屈原学会第16届年会、2015年7月27日、江蘇省淮安市(中華人民共和国)

谷口 洋、「西村時彦《楚辞纂説》」、2015年楚辞国際学術研討会暨中国屈原学会第16届年会、2015年7月26日、江蘇省淮安市(中華人民共和国)

矢田 尚子、日本楚辞學的基礎研究 以江戸・明治時期為研究対象、2013年楚辞国際学術研討会暨中国屈原学会第15届年会、2013年8月17日、河南省南陽市(中華人民共和国)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕
研究成果報告書
大野圭介、谷口洋、矢田尚子、矢羽野隆男、荒木雪葉、田島花野、野田雄史、前川正名、江戸・明治期日本における『楚辞』諸注釈解題、2017年3月

ホームページ等
<http://lisai.la.coocan.jp/soji/kaken02/index.htm>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

矢田 尚子(YATA, Naoko)
新潟大学・人文社会・教育科学系・教授
研究者番号：10451494

(2) 研究分担者

大野 圭介(OHNO, Keisuke)
富山大学・人文学部・教授
研究者番号：30293278

谷口 洋(TANIGUCHI, Hiroshi)
東京大学・総合文化研究科・教授
研究者番号：40278437

石川 三佐男(ISHIKAWA, Misao)
秋田大学・教育文化学部・教授
研究者番号：70222974
[平成26年度辞退]

田宮 昌子(TAMIYA, Masako)
宮崎公立大学・人文学部・准教授
研究者番号：70316199

矢羽野 隆男(YAHANNO, Takao)
四天王寺大学・人文社会学部・教授
研究者番号：80248046

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

荒木 雪葉(ARAKI, Yukiha)
田島 花野(TAJIMA, Kaya)
野田 雄史(NODA, Takeshi)
前川 正名(MAEGAWA, Masana)